

1. 序論

日本固有の文化である着物や帯に使われてきた伝統色には、何となくではあるが我々日本人には目で見てわかるものがある。これは、なぜなのかという疑問から、本研究では日本の伝統色の特徴を色の三属性(色相・明度・彩度)の分析によって明らかにできないかと考えた。また、フランスや中国の伝統色と比較すると三属性に差異はあるのか、さらに現代において使われている色彩とどのような差異があるのかを解析することとした。

1. 調査方法

大日本インキ化学工業(現 DIC)株式会社発行の DIC カラーガイド、日本、フランス、中国の伝統色に掲載された色を全て測色計で計測し、マンセル表色系の色相、明度、彩度を得た。数値化したものを色相ごとに 10 分類しそれぞれの色相分類毎に明度と彩度をプロットして比較し、三カ国それぞれに特徴はあるのかを調査した。

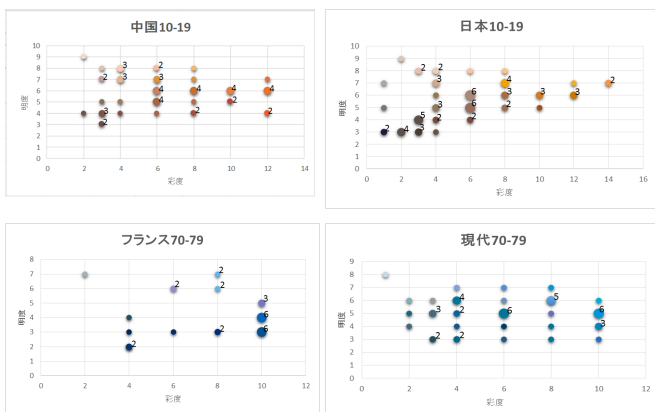


図. 1 YR系とPB系の明度と彩度

2. 結果および考察

3-1 三カ国の色相ごとの色の数の結果から

色相では三カ国の伝統色すべてで最も色数が多いのは YR 系、次に R 系、Y 系のいずれかであり、太陽の色は日本では赤色、世界的には黄色とされ、古代の人々は最初に色を感じたのが太陽の

出没の際といわれている。このあたりの色は世界中でよく使用されており、そのため伝統色でも数が多いのではないだろうか。

3-2 三カ国の伝統色を色相ごとに比較した結果から

R 系、YR 系、Y 系、GY 系の暖色やその隣の色相は明度と彩度どちらも同様の値で類似した色が各国にもあるため大きな差異が認められなかった。これは伝統色の色相の色数ではすべての国で R 系、YR 系、Y 系が多いことから色数が多いと様々な色が存在し、結果的に似た色が出てくる。そのため三カ国の暖色系には大きな差がみられなかったのだろうと考察した。

一方中間～寒色系の G 系、BG 系、B 系、PB 系、P 系、RP 系は暖色系よりも色相ごとの色数が少ない。色数が少ないため、三カ国のうちそれぞれに他の国と互いに異なる特長が認められた。

色相毎の特長として、

G 系：フランスは彩度が低いと明度が低い。

BG 系：中国は彩度が低く明度が高い色が多い。

B 系：フランスは彩度高めに色が集まる。

PB 系：中国は彩度 4 以下が多い。

P 系：日本は彩度 3 以下が多い。

RP 系：日本は彩度 4 以下が多い。

以上のことから中間～寒色系の色で国毎の特徴を捉えられると考えられた。

4. 総括

伝統色は各国とも暖色系が多く、自然の中の色が古くから取り入れられていたこと、中国は緑、青が入ると明度が高く彩度が低い色が多い。日本は紫が入ると暗い色が多く、フランスは青が入ると彩度は高い。寒色系から各国の色の違いを捉えることができ、国ごとに古くから伝わる色の特徴を掴むことが可能である。また現代の色と比較すると現代はフランス寄りであり、現代の色彩は西洋の色が基となっていると推察された。

R は赤、Y は黄、G は緑、B は青、P は紫を表す。